

## 「小さな聖書」

### ヨハネによる福音書 3章16節

日本基督教団 聖学院教会牧師、聖学院みどり幼稚園チャプレン 東野尚志

2017年のシリーズ礼拝は、全体を通して、「御言葉に聞く―宗教改革 500周年を覚えて」という共通主題が掲げられました。プロテスタント教会では、10月31日を「宗教改革記念日」と呼んでいます。そして、多くの教会が、10月31日の直前の日曜日に、毎年、宗教改革記念礼拝を行っています。私が牧師をしている聖学院教会でも、毎年、10月の最後の日曜日に、宗教改革記念礼拝を行います。それは、1517年の10月31日に、ドイツの修道僧マルティン・ルターが、当時のローマ・カトリック教会の教えを批判して、「九十五箇条の提題」と呼ばれる問題提起の文書を発表したとされているからです。

その日、すなわち、1517年10月31日、ルターは、ヴィッテンベルクの城教会の扉に、「九十五箇条の提題」を貼り出したと言われてきました。私も、世界史の授業でそのように教わりました。最近では、実際にその当日、教会の扉に貼り出したかのかどうか、それを確かめることのできる資料が残っていないとも言われます。けれども、1517年10月31日の日付で、ルターがこの問題提起の文書をマインツの司教宛てに送ったことは、残された手紙で確かめられているようです。いずれにしても、このルターの問題提起がきっかけとなって、それまでは、ローマ教会の権威と力で踏みつぶされていたさまざまな批判の言葉は、もはや抑えようがなくなりました。やがてはヨーロッパ全土を巻き込む教会改革の運動に発展して、プロテスタント教会という新しい教会が生まれることになったわけです。私たちの聖学院大学も、このプロテスタントの教会的伝統に根ざしており、10月31日を、大学創立の記念の日に定めています。特に、今年は、ちょうど500年という大きな節目を刻む記念日になるというので、世界中のプロテスタント教会で、大々的に、記念の講演会やコンサートが行われています。私たちも、「御言葉に聞く―宗教改革 500周年を覚えて」というシリーズ礼拝を通して、大きな節目の年を記念しているのです。

掲げられた共通主題に対して、さまざまな角度から、御言葉が選ばれ、また説かれてきました。私も、二週間近く悩んだ末に、先ほど読んでいただいたヨハネによる福音書3章16節の御言葉を選びました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。ルター自身が、この御言葉を「小さな聖書」「小聖書」、または「小型の福音」「小福音」と呼んだと言われるのです。この小さな御言葉の中に、福音の全体が要約されている、という意味です。ルターは、聖書というのは、イエス・キリストがそこに寝かされている飼料葉桶のようなものだとも言いました。私たちは、聖書を通して、生きておられる主イエス・キリストとお会いすることができます。聖書は、私たちが主イエス・キリストと出会う場所だと言ってもよいのです。しかも、その聖書が証する福音の全体が、このヨハネによる福音書第3章16節に集約されている。この小さな一

句から、福音の全体像が明らかになるのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」。クリスマスの季節によく読まれる御言葉でもあります。神さまの独り子である御子イエス・キリストは、今から 2000 年前、ユダヤのベツレヘムの馬小屋で、私たちと同じ人間の一人としてお生まれになりました。神の独り子が、どうして、人間となってこの世に来られたのか。その意味を、端的に告げている御言葉です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。すべては、神さまが、この世を、私たちを愛してくださったからです。私たちが、命の造り主であり、希望の源である神に背を向けて、滅びと絶望の中に落ちていくのを、神は見過ごしになさらず、私たちを、滅びの中から救い出そうとしてくださいました。そのために、神はこの地上に、私たちに独り子をお与えくださったのです。

2000 年前、天の父なる神のもとから降ってこられた御子イエスは、私たちと同じ人間の一人として、この地上に生まれてくださいました。そして、人として生きることの喜びや楽しみだけではなく、悲しみや嘆きをも、また苦しみや痛みをも味わわれました。ついには、神に背いた私たちの罪をすべてその身に背負って、私たちの身代わりとして十字架にかかって死ぬために、神の御子はこの世に来られたのです。神が、その独り子をお与えになった、というのは、独り子の身代わりの死によって、私たちの罪が赦され、私たちが神との永遠の交わりの中に迎えられ、尽きることのない命と平和を受けるためです。神の独り子である主イエス・キリストの十字架において、私たちに対する神の愛が、決して揺らぐことのない確かさをもって、現わされたのです。この地上に、どんなに悲惨な出来事が起こり、私たちの上に、どんなに理不尽な苦しみや悲しみに満ちた出来事が襲い掛かってくるとしても、神の愛の支配は、御子イエス・キリストの誕生と十字架の死、復活と昇天、この神ご自身の救いの御業の中に、はっきりと現されています。神の独り子であるイエス・キリストを、私の救い主、私たちの救い主として信じ受け入れるとき、私たちは、確かに、自らが神に愛されている神のものとして、神の愛の御手によってしっかりと捕えられ、守られていることを知るのである。

500 年前の改革者ルターは、死の床において、その地上の命の尽きるとき、自ら「小聖書」「小福音」と呼んだヨハネによる福音書 3 章 16 節の言葉を口にして、祈りつつ息を引きとったと言われます。「主イエス・キリストよ、私の魂をあなたに委ねさせてください。天の父よ、私はこの体から引き裂かれようとも、あなたのもとでとこしえに生きることを知っています。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。これは本当のことだ。アーメン。父よ、あなたの御手に私の魂を委ねます」。そう祈って、ルターはその波乱に満ちた改革者としての生涯を閉じたのです。私たちが生きているときだけではなく、死ぬときにも、死の中においても、決してむなしくなることのない真実な言葉とは何でしょうか。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。他のすべての聖書の言葉が失われてしまっても、この言葉があれば、私たちは救われる。この神の愛に守られて、生き、また死ぬことができる。それが、改革者ルターの戦いを支え、導いた信仰であったのだと思います。

2017 年 10 月 20 日 聖学院大学 全学礼拝奨励(シリーズ礼拝)